

# 花の奥に

木村 咲

雨になりそうな朝だった。図書館で読んだ本に吉野山の桜が美しいと書いてあったのを思い出し、春を探しに行ってみようと、新聞のツアー募集に申し込んだ。一人旅も気ままで楽しいだろうと思ったからだ。

今朝も、うす曇りの大気の中にある山々は、冷え冷えと薄紫に霞んで見える。まだ安らかな眠りの中にあるような気配のその中に、竹の新緑が際立って見える。麓の方から綻び始めた桜は、薄い花の色も、集って咲く濃い花の色も互いに気遣いながらも、自由に花枝を伸ばして競い合っているようだ。

麓に下ろした目線を、向こうの山へと遊ばせる。桜花と樹木を交差させた色模様には、私は平安絵巻の中のひとつの点に書き込まれたような、居心地のよさに包まれていた。

昨夜、ガイド嬢に、吉野山全図のコピーを貰っていた。あまりの広さと時間の制約を考え、奥山に絞って歩くことにした。

下千本、中千本、上千本といわれる山に、西行庵があることを知ったからだ。中千本から上千本まで小型バスが通っていますよ、と教えてくれたご夫婦に促されて、上千本に行くことにした。

下車し、よく整備された山道をさらに奥へと進む。三十分ほど歩いただろうか、下草の刈り込みなど、よく手入れの届いた杉木立が左右に幹を揃え、空を覆っていた。

西行庵は、一山越えた谷間にひっそりとくぐもっていた。一間半ほどの茅屋に土壁造りのその中に、西行を象った人形が座している。行脚に明け暮れ、様々に苦労しただろうと思ひながら聞いた西行像は、私の思惑に反

して、ふくよかで絶え間ない笑みをうかべていた。庵との対比がむなしく感じられたのはどうしてだろう。その辺りの桜には、まだ花芽の膨らみもなかった。

花の色の 雪のみ山にかよへばや

深き吉野の奥へいらるる

西行

平安末、北面の武士・佐藤義清のりきよは、世の無常を感じ二十三歳で妻や子を捨てて出家し、流浪の旅人となったという。述懐歌に優れた人とも聞かすが、その心根を、庵周辺の静謐さの中に窺い知ることができた。

庵からわずかに離れた岩間に、苔清水があった。いずこより染み出るのが、小さな小さな窪みから、苔むした竹樋を伝ってチロチロと落ちてくる水。掌に受けて口に含むと、苔の匂いが体の中に染み入ってきた。

凍てとけて 筆に汲み干す 清水かな 芭蕉

雨になった。濡れた花は雨の後、今より艶やかに匂うことだろう。振り上げば、笑うかに見える山のその奥に、秘められた侘び住まいがあることを、心に刻みつつ山を降りた。